

関 一関まで毎年興行見に行っていましたよ。

三田 俺大学の時、国技館であんみつ作ってたよ（笑）若貴が出てきた頃。

栗澤 千代の富士は衝撃的でしたね。

関 なんでもできる人でしたしね。走るのも早いし、水泳も強いし。でも結果ああやって、若いのに亡くなってしまったからね。ちょっと俺はびっくりしました。

金野 流行り廃りの一歩先を読んでいくこともそうですが、わざと遅れてやるようなことも地方では求められるじゃないですか。あまり早すぎても反応してもらえなかったり。機屋さんがオープンした当初もあまり受け入れられなかったんですもんね。

関 今の話で言うと、自分は周りの人は知ったこっちゃないで、好きなことをやっているの、時代が云々とかお客さんが云々はあまり考えてないですね。時代と存在は違うというか。それを繋げるのは、お客さんでいいんじゃないかなって。むしろ繋がらなくてもいいんですけど。今はどうしても頭や視覚で理解したがる人が多いですよ。結論を出したがるから、時間がすごい早くなった気がする。本当にさっきの相撲の話じゃないけど、当時はテレビしか見ていないから、すぐに結果が出ないので、一場所の2ヶ月がすごい長かったんですよ。でも今はどこからでも情報が入ってきちゃうっていうのがあって。今回のコロナで一番熱望したのはスポーツでしたね。家で過ごしていて、なんでもいからスポーツ観戦がしたくて。でも、サッカーもやらない、野球もやらない。野球はそれまであんまり見ていなかったんですが、どこどこが何対何だったかとか、パ・リーグがどう、セ・リーグがどうとか、そういう話がどれだけ自分の生活で大事だったかがよくわかった。僕はライブは好きじゃないから、リアルタイムで見るんじゃなくて、CDを買って聞くのが好きなんですけど、スポーツは実際にやらないと見れないですもんね。

三田 すごいCD買っているんですよ。

関 もう大きい棚が埋まるくらい。落語のCDが半分以上あります。

三田 同じ曲でも指揮者が違うとかね。

関 そうそうそう。

金野 掘り下げてますね。

関 同じ曲ばかり聞いている（笑）すごい大好きです。今の話に戻ると、結果がどうなるかっていうのは自分の中ではどうでもいいことなんです。今をどう明日に繋げるのが大事。うちの店で言うと、今は3人の子どもがここを継ぐように、外堀をがつつり作っている最中で。そういう意味ではこのコロナ禍はラッキーでしたね。

金野 逆にラッキーだったんですか？

関 期せずして、今お店で働いているんですよ。「私絶対嫌だ」って言っていたのが、段々楽しくなってきたみたいで。やっと子どもたちとアルバイト契約を結びました。うちみたいな企業は次に繋げることが大きい課題になっている。一代でやる人たちが多から、その人自身がいなくなると事業が終わるんですよ。喫茶店は特にそう。うちみたいなのは稀有だと思います。僕は、続けることが大事であって、その途中の経過、結果はなんとなくでいいと思っているんですよ。

三田 銀行員の方たちが言っていたんですが、実は赤字倒産ってほとんどないらしい。ほとんどが後継者不在で、倒産しているみたいです。だから継承ってすごい大切。教育の問題もあって、今はどうしても起業の方がもてはやされる。引き継いで事業をすることはあまり価値のあることだと思われていない、というか。僕らは商店街で育ったので、親がほとんど商売をやっている人たちだったから別にどうせ家業があるからって感じで、勉強もしなくていいやみたいな社会だったんですけどね。それは結構幸せなことではあったなと思うんですけど。

関 今すごい気になっているんですが、インターネット社会の中で本がいっぱい流通していると、実店舗で売る書店はどんな使い方をされているんですか？

栗澤 図書館的な機能を兼ねていたところがあったんですけど、図書館的な機能は今は少なくなりましたね。業界的に売上が縮小しているので、かなり厳しくなっていると思います。

関 僕の感覚では、ネットがあるから本を読まなくなっただけのことがあるんですよ。たくさん買って置いて、積んでおくだけの本が増えてきた。